

弥生時代中期における竪穴住居平面形態の画期とその背景

飯塚美保

1. はじめに

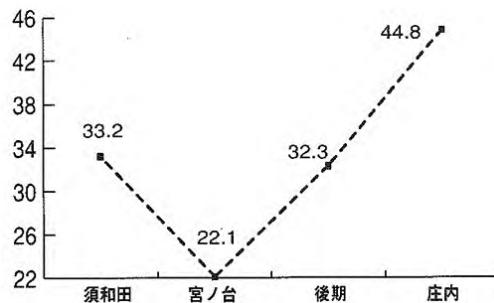
(公財)かながわ考古学財団には各時代ごとの研究プロジェクトがあり、毎年決めたテーマに沿って検討を行っている。1994～1995年にかけて、弥生時代研究プロジェクトで、県内の弥生時代の竪穴住居について集成を行った（弥生時代研究プロジェクトチーム1994・1995）。当時、報告書が刊行済みの県内の弥生時代の遺跡から竪穴住居を集成し、各種検討を行った中で、時期ごとに竪穴住居の平面形態の「方形指数」

がどのように変化していくか、比田井克仁氏の算出方法（比田井1991）を参考に分析を行った（註1）。その結果、「須和田期」（中期中葉）は方形志向であるのに対し、「宮ノ台期」（中期後葉）で一気に橢円形となり、後期になるにつれてまた方形化し、Vの字のグラフとなることが明らかとなった（第1図）。

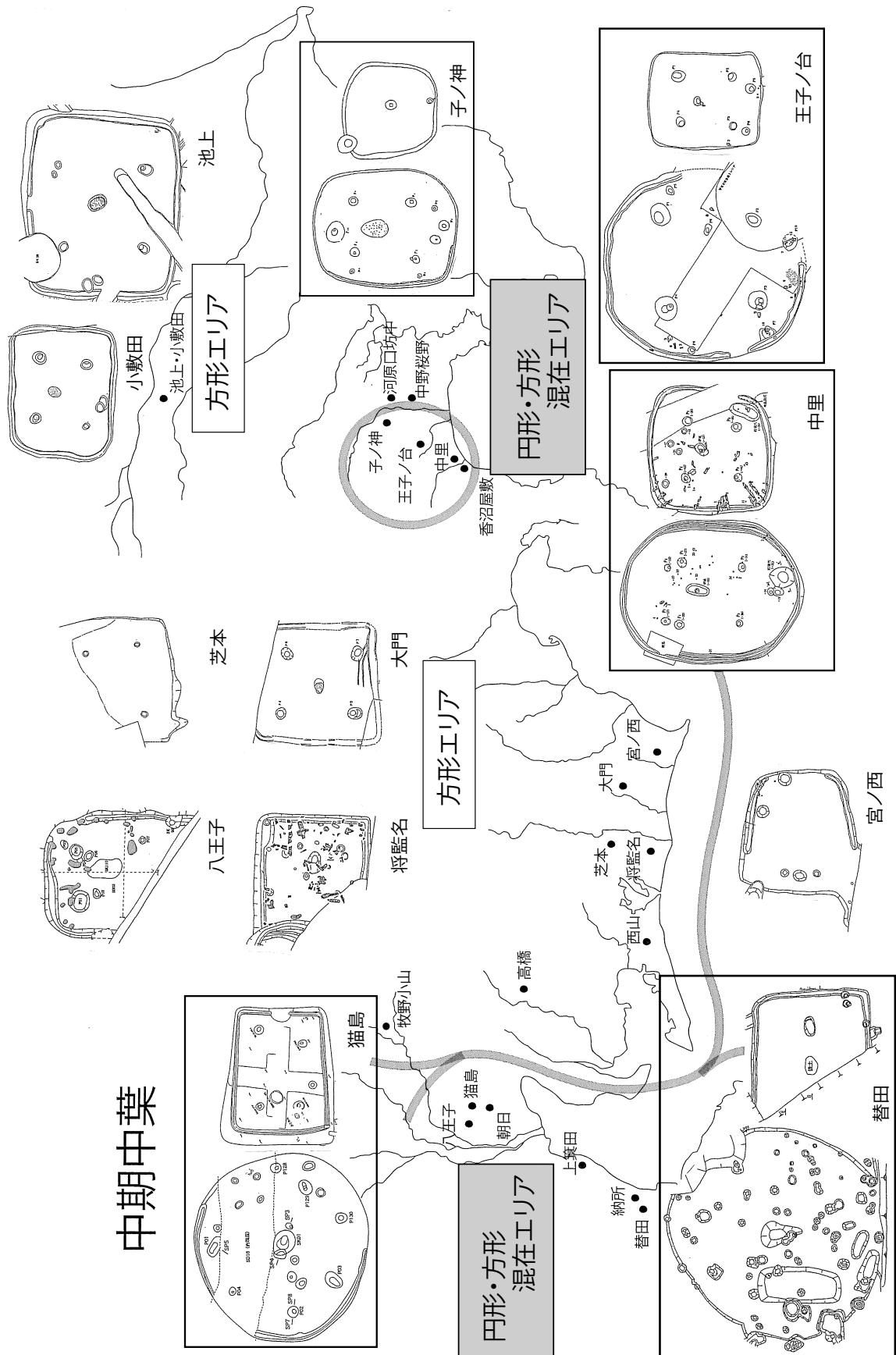
従来より、弥生時代から古墳時代への平面形態は時代が下るにつれ橢円形から隅丸方形へと変化することが指摘され、中期後葉以降では同様の結果となったものの、中期中葉の平面形の「方形志向」については、資料数の少なさから、当時はその背景について検討から除外した経緯がある。資料数が相対的に少ないことは今も変わらないが、小田原市中里遺跡などの成果も新たに増え、また、周辺地域の様相も明らかになりつつある現在、中期中葉と中期後葉の間に見られる竪穴住居の連続性と非連続性に着目して、30年前の宿題を考えてみたいと思う（註2）。

2. 時期ごとの平面形態の様相

竪穴住居の形態には時期差・地域差があり、その抽出により、住居構造や建築技術の地域差の抽出、更に地域間の関係性の検討が先駆によってなされてきた（都出1985他）。弥生時代の竪穴住居の構造について、都出氏により、西日本には中心点を有する主柱配列求心構造（求心構造）、東日本には主柱配列有軸対称構造（対称構造）の二つの大きな地域差が指摘され、その境界は愛知県と富山県付近となり、遠賀川式土器分布圏の東限と重なるとの指摘がされた（都出1985）。その後、地域を限定しての論考も数多く出され、30年前と比べてより様相が明らかになりつつある。今回、南関東地方の中期中葉から中期後葉の竪穴住居形態を考える上で大きな影響を与えたであろう東海地方、その隣接する近畿地方を視野にいれつつ検討してみたい。
【中期前葉段階以前】近畿地方の竪穴住居の平面形態としては、多数の円形と少数の方形が認められるようである（埋蔵文化財研究集会2006・豆谷2011・上田2018）。弥生時代前期の方形プランについては縄文時代からの系譜とし、当該地域で中期後半から出現する方形プランの竪穴住居とは別系譜という指摘もあり（上田2018）、円形のものが採用されていく様相がうかがわれる。尾張では前期及び朝日式段階では円形を基本

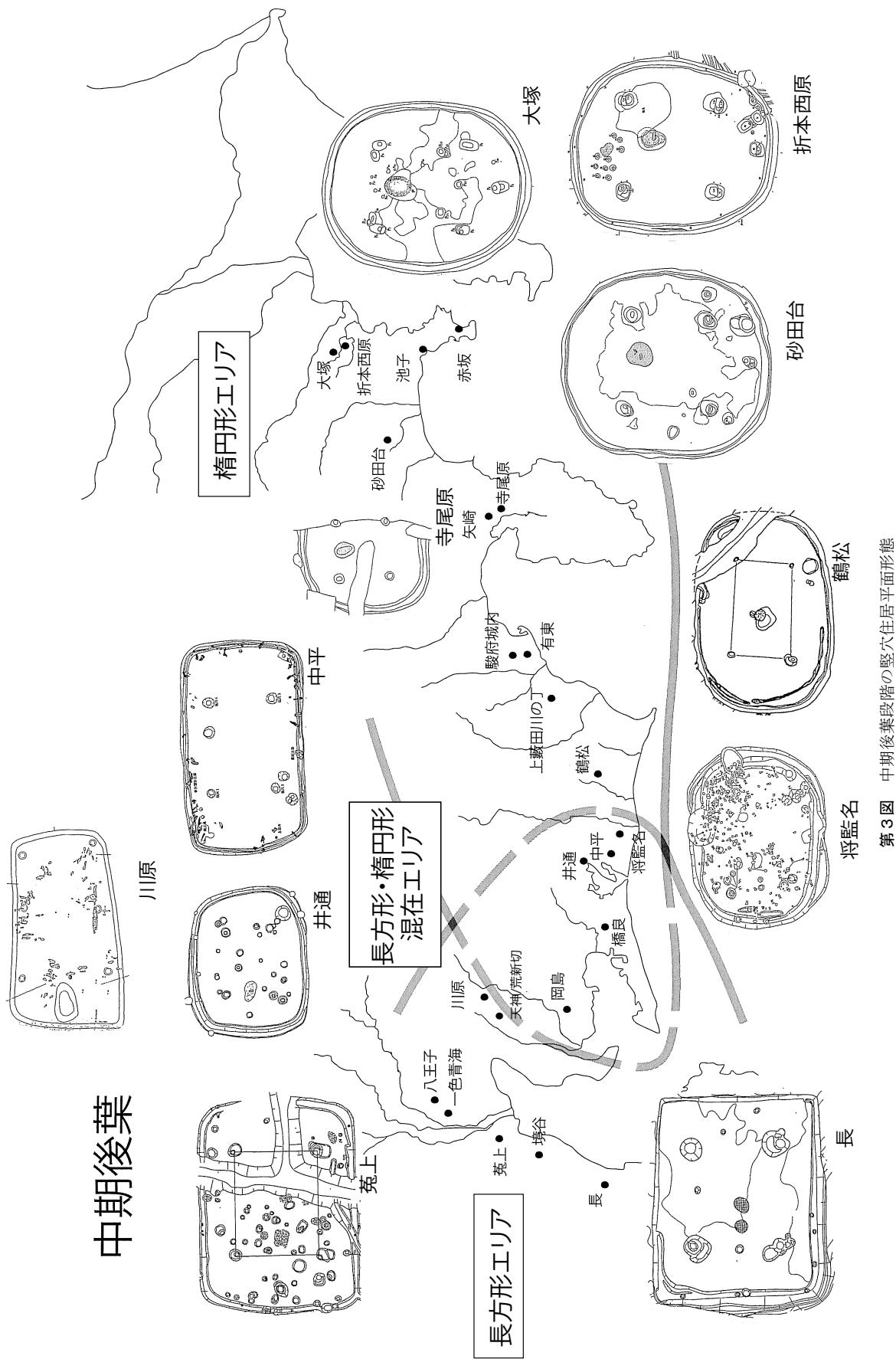


第1図 方形指数の時期別平均値
(弥生時代研究プロジェクトチーム1995)



第2図 中期中葉段階の竪穴住居平面形態

弥生時代中期における竪穴住居平面形態の画期とその背景



第3図 中期後葉段階の竪穴住居平面形態

としているようであり（鈴木2001・石黒2023）、近畿地方と親和性が高いようである。三河以東では水神平式段階の吉胡貝塚例が円形である以外は平面形は方形となり、4本柱穴を基本として方形もしくは台形配置となるという（註3）（岩瀬2001）。尾張と三河付近を境として西は円形を主体とし、東は方形主体という地域差がみられ、遠賀川式土器の分布と条痕文土器分布圏の境界と住居プランの境界が重なるとの指摘もある（岩瀬2001）。

南関東地方では該期の様相は明らかではないが、北関東地方では、浮線文期から後述する中期中葉段階まで、平面形態は方形・長方形を基本とし、柱穴配置は方形・台形を呈する共通した様相を示すという（註4）（小林2004）。三河以東から関東地方にかけての中期前葉以前においては、方形もしくは台形の柱穴配置をもつ方形プランの堅穴住居が選択されていたと考えられる。

【中期中葉段階】中期中葉段階の平面形態としては、伊勢湾西岸では西日本の影響により円形プランの住居が過半数を超える集落がある一方で、濃尾平野では円形プランの割合が下がり、天竜川以東から関東にかけては方形プランが採用されるという先行研究がある（松井1988）。詳細をみると、伊勢湾西岸は円形が主体で、中期前葉に方形が出現し中期中葉には増加傾向となるようである（石井2010）。濃尾平野では一宮市猫島遺跡例のように円形と方形が検出される一方で、一宮市八王子遺跡では方形が主体となるなど、伊勢湾沿岸は円形と方形が混在するようである（石黒2023）（第2図）。

瓜郷式土器や嶺田式土器分布圏では方形を基本とするという指摘もなされており（鈴木2001）、基本的には前段階同様に方形のプランが採用された（註5）。有東富士見台式土器分布圏の様相は不明な部分が多いが、周辺地域と同様に方形プランと考えられる。

関東地方でも、前段階に比べ資料数の増加がみられる（註6）。平塚市王子ノ台遺跡の報告書において、大島慎一氏は検出された堅穴住居が「多様」であり、中期後葉宮ノ台式段階の「均質で安定した平面形」と比べ不安定な印象を受けるとし、南関東地方西部の特徴と指摘した。一方で、利根川流域の関東地方北部では方形のものが多くみられるとして、地域差の抽出を行っている（大島2000）。その後、小田原市中里遺跡の報告書が刊行され、102軒もの新たな堅穴住居の検出例が追加された。報告書によれば、「様々な平面形」が存在し、「楕円形基調」が50%、「隅丸方形基調」のものが25%を占めるという。一方、全体の1割近くは円形を呈するもので、報告書では西日本（畿内）の影響を想定している。

第2図に示したように、中期中葉段階には、濃尾平野から伊勢湾西岸にかけては円形と方形、三河以東から関東地方にかけては方形を基本とするが、神奈川県域においては円形と方形が混在する様相を示す。30年前のプロジェクトによる神奈川県下の集成で明らかとなった該期の方形志向は、このような状況を反映したものであったと考えられる。

【中期後葉段階】検出例は各地で大幅に増加する。三河以西が長方形プラン、天竜川以東では長楕円形プランとなり、西遠江では両者が混在するとの先行研究がある（松井1992）。その後、伊勢湾沿岸から中部高地・関東地方までを視野にいれ、蔭山誠一氏が中期後葉の各地域の様相を明らかにしている（蔭山1996）。近畿地方から伊勢湾西岸は平面形態が円形、炉を囲んだ多角形の柱穴配置となるのに対して、伊勢湾東岸から西遠江、中部高地一帯は隅丸（長）方形、長方形の柱穴配置、炉も偏在する特徴がみられるとしている。

第3図に示したように、尾張や三河は辺が直線的な隅丸長方形であるのに対し、東に行くにつれて丸みを帯び、東遠江以東関東に至るまで楕円形を呈するものが多い。西遠江は隅丸長方形と楕円形の混在するエリアとなる。住居形態からも天竜川を境とした東西の地域差が指摘されている（松井1992・岩瀬2001・鈴木

2001)。天竜川を境として白岩式土器分布圏、その東の有東式土器分布圏、宮ノ台式土器分布圏で橿円形が採用されていることとなる。白岩式土器の強い影響のもとに宮ノ台式土器が成立したとも言われているが、土器型式の類似性だけでなく、堅穴住居の平面形態でも類似性が認められることとなる。

3. 中期中葉から中期後葉に見られる変化

(1) 中期中葉の方形志向の背景

各時期ごとの堅穴住居の平面形態を中心に、その様相を概観してきたが、30年前に明らかにしえなかった神奈川県下における中期中葉の方形志向は、瓜郷式土器分布圏以東から関東地方に至る広範囲の方形プランエリアに属していたためと考えられる。中期前葉以前の条痕文系土器分布圏の系譜を引き、方形プランの堅穴住居が選択されていたと考える。

また、中期後葉の宮ノ台式段階の急激な方形指数の低下、すなわち橿円形化も、天竜川を境とした東遠江以東から南関東地方に至るまでの橿円形を選択するエリアに属していたためと考えられる。宮ノ台式段階以降後期にかけての方形化の流れは、周辺地域と同様に徐々に進んでいき、30年前の第1図のような、中期中葉と後葉との間で平面形態の断絶とも見える状況が生まれたと考えられる。

けれども、中期中葉と後葉の間に断絶があったかどうか、細かくみると状況はより複雑である。第4図に示したように、神奈川県西部一帯の中葉の堅穴住居に、後続する宮ノ台式段階の堅穴住居とよく類似する形状のものが散見されるのである。該期の南関東西部の「多様」性のなかに、後続する宮ノ台式段階の堅穴住居につながる萌芽が認められるということは、既に大島慎一氏により指摘されている(大島2000)。

宮ノ台式土器の成立には白岩式土器の強い影響が指摘されている。30年前には、中期中葉における小規模集落が散在する社会が中期後葉の外的なインパクトにより一気に遺跡数を増加させたという理解がなされていて記憶している。しかし、この30年で弥生時代中期中葉段階の大規模な変動が明らかになるにつれ、「中期中葉と後葉との間での平面形態の断絶」とも見える状況から、「中期中葉と後葉との間での平面形態の継続」を見出だすことができるのである。

中期中葉段階、三河・遠江の瓜郷式土器分布圏から東遠江の嶺田式土器分布圏、駿豆の有東富士見台式土器分布圏では、前段階の小規模散在的な集落形成と異なり、水田稻作の導入・定着による沖積平野への進出がなされる(鈴木2018・2022)。また、南関東地方でも、独立棟持柱をもつ掘立柱建物や井戸といった在地の系譜では考えにくい遺構を含む約4万m²の大規模集落である中里遺跡が沖積平野で確認された。

中里遺跡のみならず、海老名市河原口坊中遺跡、中野桜野遺跡、君津市常代遺跡など、瀬戸内系や貝田町式系土器が出土し、沖積平野の自然堤防上に占地する、南関東における弥生中期社会の転換の中核を担ったと評価される「低地占地型集落」の類例も増加している(石川2000)。関東地方沿岸部のみならず、北関東地方でも埼玉県の池上・小敷田遺跡などの例から、中期中葉が重要な転換期とされ、中期中葉は広範囲にわたり遠隔地との交流・交易を介して大きな文化的転換が進行した段階との評価がある(石川2011)。

この時期は天竜川以東から関東地方南部の太平洋沿岸、なかでも相模湾・東京湾沿岸南部を中心に、近畿地方や東海地方の土器の出土が認められるが、近畿系は播磨系が多く、東海系は伊勢湾西岸のものが多いとの指摘がある(註7)(杉山2022)。また、伊勢湾西岸の貝田町式土器が紀伊半島南部でも出土することから、貝田町式土器が東のみならず西にも動いているという指摘(萩野谷2017)があり、中期中葉段階の広域な地域間交流に、伊勢湾西岸の人々の果たした役割とともに、太平洋沿岸をつなぐ近畿地方から伊勢湾沿岸を

経て、南関東地方へいたる水稻農耕技術をもった人びとのたどったルートの存在、伊勢湾沿岸地域と東海東部、近畿地方との双方向交流の存在がクローズアップされている（長友・石川2022 石黒2022）。

第4図で示したように、平塚市王子ノ台遺跡では、YK 3住のような方形プランの堅穴住居とともにYK 1住のような円形プランの堅穴住居、また後続する中期後葉宮ノ台式段階の非常に均一的な平面形態（註8）に類似し、宮ノ台式段階の堅穴住居へとつながる過渡期的様相を呈するYK 8住などがある。厚木市子ノ神遺跡でも、円形を呈する第12号址や方形の第96号址がある一方で、第32号址などは宮ノ台式段階と類似性が高い。また、小田原市小田原城下香沼屋敷跡第Ⅲ地点の検出例は円形を呈するもので、方形プラン分布圏においてやや特異な存在である。26号住居址は円形プランの壁に沿うように柱穴が配置され、中央近くに炉が検出されており、その系譜が興味深い。香沼屋敷跡例は、中里遺跡と同時あるいは後出する段階と考えられるため、中里遺跡に伝わった西方からの情報が、周辺に広がった可能性が考えられる（註9）。小田原市中里遺跡では、方形プランの堅穴住居とともに円形を呈するものが一定数認められる。西方からの影響として多角形の柱穴配置例の抽出を試みたが、遺存状態が良くないものの、11・81号住居址等は多角形の柱穴配置の可能性もあるのではと考える。そして、61号住居址のような方形プランの住居に混じり、21・22・30・45・64・69・88号住居址等のように、楕円形プランで付帯施設も均一的な宮ノ台式段階の堅穴住居といって違和感のないものも多く確認できる。大島氏が指摘した「南関東西部の多様性」のなかにみられる宮ノ台式段階の堅穴住居につながる萌芽が、中里遺跡でも認められると言える。

大島氏が指摘した北関東と南関東西部の地域差は、北関東を中心に分布する池上式土器分布圏が中部高地と親和性が認められるのに対して、南関東の中里式土器分布圏が太平洋沿岸の東海地方と親和性が認められることから、堅穴住居の平面形態でも地域差が生じている可能性が考えられる。

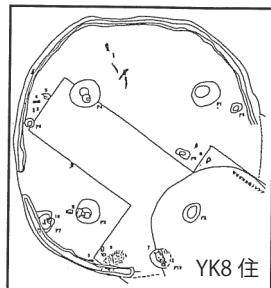
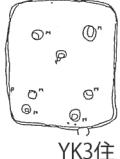
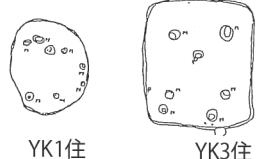
現状で神奈川県西部の限られた範囲ではあるものの、該期の堅穴住居を検出できた遺跡数の少なさを考慮に入れると、ある程度意味のある分布となる可能性が考えられる（註10）。前段階の堅穴住居の形態が不明であることに加え、資料の増加を待つ必要があるが、現状で近畿地方や東海地方西部といった広域の交流が顕著に認められる神奈川県西部において、方形一辺倒ではない「多様性」が認められることに注目したい。この時期、三河以東関東地方にいたる太平洋沿岸は方形プランのエリアであり、関東地方北部や中部高地など周辺地域を視野に入れても円形プランの系譜をたどることは難しい。そのため、播磨地域を含む近畿地方や伊勢湾西岸地域からの影響が「多様性」の背景にあった可能性を想定したい。

このことは中里遺跡の堅穴住居の新旧関係からもうかがえる。報告書では2軒の重複関係が20例、3軒の重複関係が3例あったことが記載されている。具体にみると、宮ノ台式段階と言っても違和感のない楕円形プランの均一的な堅穴住居同士が重複する例は複数みられる。一方で、円形や方形プランの堅穴住居と宮ノ台式段階に類似する楕円形プランの堅穴住居の重複例では、基本的に楕円形のものが新しい。このことから、方形プランの分布圏に西方からの円形プランの情報が加わり、その結果宮ノ台式段階の楕円形プランの祖形とも言うべき形態が形成されたと考える。

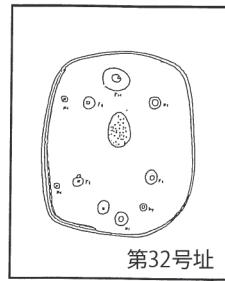
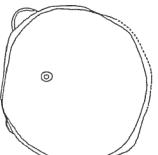
ただし、中里遺跡や他の遺跡の堅穴住居の柱穴配置をみると、平面形態が円形でも方形でも、基本的に方形配置の4本柱穴となる。都出氏の「対称構造」に相当するものであり、東日本的と言える。大型の棟持柱建物や井戸といった西日本的な遺構の存在が特筆される中里遺跡であるが、堅穴住居の構造をみると東日本的であることは興味深い。また、播磨地域で特徴的とされる「10型中央土坑」（山下2010）に類似するような形態や東海地方では確認されている松菊里型住居に類似するような形態もみられないようである。

中期中葉

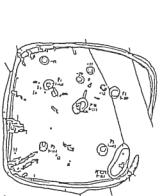
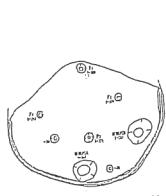
王子ノ台



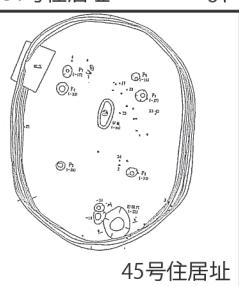
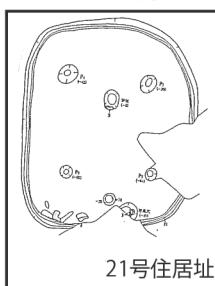
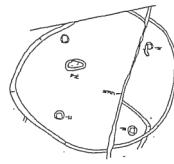
子ノ神



中里



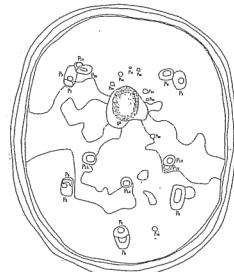
香沼屋敷



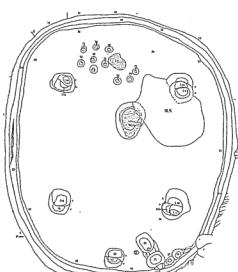
中期後葉につながる可能性が考えられる形態

中期後葉

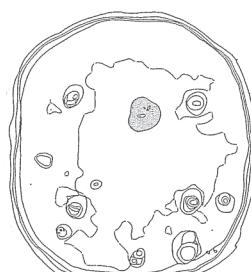
大塚



折本西原



砂田台



第4図 神奈川県下における中期中葉及び中期後葉の堅穴住居

中里遺跡の墓制が播磨地域を含む近畿地方ではなく、伊勢湾沿岸由来の墓制であるという指摘がある（石川2022）ように、堅穴住居についても近畿か東海かという単純化できる話ではないようである。大型の棟持柱建物や井戸をつくる一方で、数多くの堅穴住居の形態は在地の系譜をひきつつ、やや変容しているというところであろうか。

(2) 中期後葉の楕円形志向の背景

そして、もう一つの大きな問題として、中期後葉の天竜川以東南関東地方にいたる地域の楕円形プランの

平面形態の成立背景がある。周辺地域の様相を概観すると、三河以西の長方形、比較するとやや隅が丸くなつた西遠江の隅丸長方形に対して、天竜川以東から南関東地方では、この段階で楕円形へと軌を一にして変容している。土器型式で言えば白岩式土器・有東式土器・宮ノ台式土器分布圏に相当する地域が該当し、これらの土器型式がその成立期等に関与したことは既に先学の指摘するところである。土器型式のみならず、堅穴住居の平面形態でも類似性が認められることとなる（註11）。

この天竜川を境にした大きな地域差は、凹線文土器を受容する地域が方形、受容しない地域が楕円形と指摘がされている（松井1992）。古い凹線文土器は吉備や播磨にみられ、近畿地方や瀬戸内地方、山陰、北陸、東海地方へと拡散し、その分布圏は銅鐸祭祀の分布圏と重なるという指摘もある（長友2022）。これらに組み込まれなかつた白岩式土器・有東式土器・宮ノ台式土器分布圏に相当する地域の繋がりが浮かび上がる。

中期中葉段階で中期後葉の楕円形プランへとつながる萌芽が認められることから、在地からの系譜で追える可能も考えられるかと思われる神奈川県西部であるが、中里式段階以降安藤広道氏の宮ノ台式Si I期及びSi II期までの段階、大里東遺跡段階や久野多古境遺跡段階の南関東地方の堅穴住居の形態は明らかになつているとは言い難く、この段階の様相が明らかになって初めて、より詳細な変遷を追うことが可能になると考へる。また、白岩式土器・有東式土器分布圏でも、中期中葉から中期後葉への変化をスムーズに追えるとは言い難いように感じられる。白岩式土器・有東式土器分布圏でも、近畿系や東海地方西部の土器は、太平洋沿岸の大型河川流域の遺跡を中心に点在するようであり、将来的には、前段階からの系譜がスムーズに追える可能性もゼロではないのかもしれない。白岩式土器・有東式土器分布圏において、前段階の方形プランの住居形態がどのように楕円形プランへと変化したのか、検証することができて初めて、天竜川以東から関東地方太平洋沿岸における住居プランの変化の背景を読み解くことが可能になると考える。今後の更なる資料の増加に期待したい。

4. おわりに

本稿では、30年前の集成時の何度みても不思議だと感じた「V字形」のグラフの理由について、「中期中葉の方形志向の背景」と「中期後葉の楕円形志向の背景」を中心に検討を行つた。

中期中葉の瓜郷式土器分布圏以東から関東地方に至る広範囲の方形志向のエリアの広がりのなかで、神奈川県西部の特殊性について検討を加え、該期の神奈川県西部の「多様」性のなかに、後続する宮ノ台式段階の堅穴住居につながる萌芽を認め、中期中葉段階の広域な地域間交流を背景とした伊勢湾沿岸以西の影響を想定した。一方で、平面形態が円形でも方形でも、基本的に方形配置の4本柱穴となることを確認し、都出氏の「対称構造」に相当し、東日本的と言えることも確認した。大型の棟持柱建物や井戸をつくる一方で、堅穴住居の形態は在地の系譜をひきつつ、やや変容していると考えられる。中里遺跡の墓制が播磨地域を含む近畿地方ではなく伊勢湾沿岸由来の墓制であるように、堅穴住居についても、その背景は複雑と言える。

また、中期後葉の南関東地方の楕円形志向の背景として、白岩式土器分布圏・有東式土器分布圏・宮ノ台式土器分布圏の楕円形志向を確認した。天竜川以西の凹線文土器波及圏及び銅鐸祭祀分布圏に隣接する、天竜川以東から南関東地方にかけた一つの大きな地域性の抽出を行つた。神奈川県西部のように前段階からの系譜が追えるように見える地域がある一方で、前段階からの系譜がスムーズに繋がらない地域もあり、楕円形志向の背景は今後の資料の増加を待ちつつ、引き続き検討が必要と考える。

今回は平面形態を中心とした検討となつたが、堅穴住居の付帯施設についても今後の検討課題としたい。

謝 辞

本稿を作成するにあたり、次の方々のご教示を得た。記して感謝したい（敬称略・五十音順）。

石黒立人・伊丹 徹・大島慎一・小泉祐紀・篠原和大・鈴木とよ江・立花 実

【註】

- 註1 住居形態の変化について、住居の隅の部分に焦点をあて、隅の丸みの度合いを客観化するため、指数化を試みたものである。詳細は比田井氏の論考によるが、四隅それぞれで指数を算出し、その平均をその堅穴住居の指数としている。指数0は堅穴住居の隅が円、指数100は直角を示すこととなり、指数が上がるにつれ方形化が進むこととなる。
- 註2 周辺の地域では平地式住居等が検出されているケースもあるが、今回は堅穴住居に限定して考えることとしたい。
- 註3 条痕文土器分布圏では、櫻王式段階の稻武町クダリヤマ遺跡、水神平式段階の吉胡貝塚、豊橋市奈木4号墳、浜松市前原VII遺跡、続水神平段階では浜松市沢上IV遺跡、浜松市半田山遺跡例が岩瀬彰利氏により集成されている。
- 註4 安中市注連引原II遺跡、中野谷原遺跡、大上遺跡、高崎市新保植松遺跡例が小林青樹氏により集成されている。
- 註5 豊田市高橋遺跡、豊橋市西山遺跡、浜北市東原B遺跡、浜北市芝本遺跡、浜北市将監名遺跡、袋井市大門遺跡、菊川市宮ノ西遺跡などがある。
- 註6 平塚市王子ノ台遺跡、秦野市砂田台遺跡、厚木市子ノ神遺跡、小田原市小田原城下香沼屋敷跡第III地点、小田原市久野遺跡群多古境第II地点、小田原市中里遺跡、埼玉県池上・小敷田遺跡などがある。
- 註7 杉山氏によれば、天竜川以東では、中期中葉の畿内系土器は菊川市宮ノ西遺跡、静岡市原添遺跡、小田原市中里遺跡、平塚市王子ノ台遺跡、真田・北金目遺跡、海老名市河原口坊中遺跡、中野桜野遺跡、君津市常代遺跡の8例で、特に大型河川沿いの遺跡から出土する傾向があるという。
- 註8 中期後葉宮ノ台式土器分布圏の堅穴住居の平面形態は、非常に均一化している（飯塚2003・2016）。「楕円形」もしくは東海地方に比べるとかなり丸みを帯びた「隅丸（長）方形」の平面形態に周溝を巡らすことが多く、主柱穴は4本柱の対称構造である。長軸上に梯子穴が掘り込まれ、梯子穴の脇に貯蔵穴が掘り込まれることが多い。出入り口側から見て長軸上、奥の柱近くの偏った位置に地床炉が掘り込まれる。炉の長軸は堅穴住居の長軸と同じであることが多いが、直交するように細長い石を据えた「枕石炉」などがみられる。また、炉の付帯施設と考えられる小ピットや炉の奥側の壁近くに小ピット群が検出されるなどの特徴がある。
- 註9 大島慎一氏のご教示による。
- 註10 相模川東岸の海老名市河原口坊中遺跡や中野桜野遺跡ではこの段階の堅穴住居は現状では検出されていないため、この「多様性」がどこまで面的に広がるかは、類例の増加を待ちたいが、注目していきたい。近畿地方や伊勢湾西岸の土器が確認できる房総半島沿岸部や静岡県の太平洋沿岸における堅穴住居の様相にも注意を払う必要がある。
- 註11 今回は資料数の制約もあり詳細を検証できなかったが、遠江では東西方向に長軸をもつ例が多いのに対し、駿河以東では南北に長軸をもつ例が多い印象を受けた。地形なども考慮しなくてはならないが、注意を払っていきたい。

【引用・参考文献】

- 飯塚美保2003「宮ノ台期堅穴住居にみられる地域性」『西相模考古』第12号
- 飯塚美保2016「宮ノ台式土器分布圏における堅穴住居の特色とその背景」『西相模考古』第25号
- 石井智大2010「伊勢湾西岸地域における四線紋系土器期集落の様相」『伊勢湾岸弥生社会シンポジウム・中期篇』
- 石川日出志2000「南関東の弥生社会展開図式・再考」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』 東京堂出版
- 石川日出志2001「関東地方弥生時代中期中葉の社会変動」『駿台史学』第113号
- 石川日出志2022「中里遺跡と南関東地方の農耕化」『南関東の弥生文化 東アジアとの交流と農耕化』 吉川弘文館
- 石黒立人2022「東海地方の集落変化と関東地方」『南関東の弥生文化 東アジアとの交流と農耕化』 吉川弘文館
- 石黒立人2023「弥生時代の「堅穴建物」をめぐる二、三の問題」『弥生文化博物館研究報告』第8集
- 岩瀬彰利2001「東海地方中部における条痕文期住居の様相」『三河考古』第14号
- 上田裕人2018「農耕開始期の近畿集落の堅穴建物とその特性」『初期農耕活動と近畿の弥生社会』 雄山閣
- 大島慎一2000「第2部遺構の分析」『王子ノ台遺跡第III卷 弥生・古墳時代編』 東海大学校地内遺跡調査団
- 蔭山誠一1996「堅穴住居の地域性が表れる背景—弥生時代中期後葉における伊勢湾沿岸地域を中心にして—」『財団法人愛知県埋蔵文化財センター年報 平成7年度』
- 小林青樹2004「農耕開始期の居住システムと住居構造－中部高地・関東を中心に－」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第12集
- 佐藤兼理2022「農耕開始期における堅穴住居構造の変遷－長野盆地・松原遺跡を中心に－」『考古学集刊』第18号
- 杉山浩平2022「関東地方弥生社会の形成と太平洋沿岸の海人」『南関東の弥生文化 東アジアとの交流と農耕化』 吉川弘文館

鈴木敏則2001「第1節堅穴住居の平面形態」『静岡県浜松市法ヶ崎遺跡』 浜松市教育委員会
鈴木敏則2018「続水神平式土器の様式構造と社会－湖西市横枕I遺跡から－」『論集 弥生時代の地域社会と交流－転機8号－』
都出比呂志1985「弥生時代住居の東と西」『日本語・日本文化研究論集』大阪大学文学部（都出比呂志1989『日本農耕社会の成立過程』に再録）
長友朋子・石川日出志2022「総論 東アジアにおける関東地方の弥生社会」『南関東の弥生文化 東アジアとの交流と農耕化』吉川弘文館
長友朋子2022「土器の移動からみた近畿地方と中里遺跡」『南関東の弥生文化 東アジアとの交流と農耕化』吉川弘文館
萩野谷正宏2016「紀伊半島南部沿岸出土の弥生中期東海系土器の系譜」『古代』第139号
馬場伸一郎2008「長野盆地南部における縄文晚期後半から弥生時代の遺跡動態と堅穴住居構造」『地域と文化の考古学II』
比田井克仁1991「住居形態の変遷とその画期」『古代探叢II』 早稲田大学出版部
松井一明1988「まとめ」『大門遺跡一大門I遺跡第4次発掘調査報告書一』袋井市教育委員会
松井一明1992「考察－中遠地域の住居プランの変化－」『鶴松遺跡V』袋井市教育委員会
豆谷和之2011「奈良県弥生時代堅穴住居の集成」『みづほ』42
山下史朗2010「堅穴住居跡から見た播磨弥生社会の動態」『同志社大学考古学研究会50周年記念論集』
埋蔵文化財研究集会2006『第55回埋蔵文化財研究集会 弥生集落の成立と展開 発表要旨集』
弥生時代研究プロジェクトチーム1994・1995「弥生時代堅穴住居の基礎的研究（1）（2）」『神奈川の考古学の諸問題』
かながわの考古学第4・5集 神奈川県立埋蔵文化財センター

【図版出典】※第2～4図出典

長：三重県埋蔵文化財センター 2000『長遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告115-9
菟上：三重県埋蔵文化財センター 2005『菟上遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告227-7
替田：三重県埋蔵文化財センター 2008『替田遺跡（第1・2次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告115-15
猫島：（財）愛知県教育サービスセンター 2003『猫島遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第107集
八王子：（財）愛知県教育サービスセンター 2001『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集
川原：（財）愛知県教育サービスセンター 2001『川原遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第91集
井通：（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所2008『井通遺跡II』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第181集
将監名：静岡県埋蔵文化財センター 2012『将監名遺跡』静岡県埋蔵文化財センター調査報告第11集
宮ノ西：菊川市教育委員会2016『宮ノ西遺跡発掘調査報告書 - 第4次調査 -』
芝本：浜北市教育委員会1985『浜北市芝本遺跡B地点』
中平：浜松市教育委員会1982『西鴨江中平遺跡』
大門：袋井市教育委員会1988『大門遺跡 - 袋井市大門遺跡第4次発掘調査報告書 -』
鶴松：袋井市教育委員会1992『鶴松遺跡V』
寺尾原：函南町教育委員会2022『寺尾原遺跡第7地点』
小敷田：埼玉県埋蔵文化財調査事業団1991『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書95
池上：埼玉県教育委員会1984『池守・池上』
砂田台：神奈川県立埋蔵文化財センター 1989『砂田台遺跡I』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20
折本西原：横浜市埋蔵文化財調査委員会1980『折本西原遺跡』
大塚：横浜市埋蔵文化財センター 1994『大塚遺跡 - 弥生時代環濠集落址の発掘調査報告 I』
中里：玉川文化財研究所2015『中里遺跡発掘調査報告書』
子ノ神：厚木市教育委員会1978『子ノ神』／厚木市教育委員会1983『子ノ神II』
王子ノ台：東海大学校地内遺跡調査団2000『王子ノ台遺跡第III卷 弥生・古墳時代編』
香沼屋敷：小田原市教育委員会2004『小田原城下香沼屋敷跡第III・IV地点』